

#Three Appeals with Style

特集

地方“装”生

城下町の面影を想起させる旧橋、金鳥城を囲う若葉の緑陰、足を止めた人に思索を促す現代美術館。遊園地からこぼれる笑い声と瀬戸大橋を望む丘陵、倉敷駅前から伸びる商店街の街灯。再開発の進む岡山駅前といつもの公園、緩やかに流れる旭川。私たちの身近にある光景の中に置かれた3サロンがつくったスタイルは、日常に投じられた異物や装飾ではなく、都市に働きかけるエレメントだ。baho IZM は倉敷の路地で光と戯れる反骨の意志を与え、Rilie は穏やかな街並みに色彩によって揺らぎを差し込み、ParveMix は親しみやすさを土台に一步先の可愛らしさを表出させた。髪や化粧、服装は個人の趣味に矮小化されるものではなく、都市のディティールを形成する社会的行為なのである。三者三様の個性が発揮されたアプローチは、視覚的にそのことを語ってくれた。

装いが、まちをつくる

岡山各所で撮ったこれらの写真を見て、貴方は何を思うだろうか。リアルではない非日常、突飛奇抜、作られた世界観。自分とは無縁だと退ける視線もあれば、潜在価値を読み取る眼差しもあるだろう。本誌は、アヴァンギャルドであることだけを肯定はしていない。「いなたい」カッコよさがあることも十分に理解している。そこで提唱したの

が「Three Appeals with Style」というキーワードだ。装いが都市の景観に割り込み、そこに暮らす人の自己像を揺さぶる、その作用によって地域の輝きが増すことを期待している。街は舞台、主役は自分。誰もが自信とプライドを持って生きる様が、地域のプレゼンスを高め、私たちの暮らしをより素敵なものにしてくれるはずだ。

STYLED FOR REGIONAL REVIVAL

特集

EXPERIMENT #01

Location

@ Okayama city

OKAYAMA CASTLE

SCENE #01

Hair: Ryoma Ishimura
(From Rilic)
Makeup: Yuka Kudo
Stylist: Maruri Kawakami
Model: Miyu



石村氏(三三)が今回のスタイリングで狙ったのは、「街の日常にわずかな違和感を差し込むこと」。(普通ではない)選択をする勇氣があれば、誰にでも挑戦できるスタイル——普通と異質の境界を探りながらデザインが組み立てられた。その境界線上で構築されたヘアデザインは、モデルの内に秘められた独特の気配と、ノールでありながらも鋭利で宇宙的なニュアンスを感じる衣装の輪郭とが交錯したものだ。岡山城という歴史の層を背に、風景に浸食するように立ち現れたのは、心地よくも挑発的な(違和感)だった。



THE MAKING OF SCENE

PLUG 031

PLUG 030



EXPERIMENT #02
location
@ Okayama city

OKAYAMA KORAKUEN AREA

SCENE #02

Hair: Ryoma Ishimura
(From_Rilie)
Makeup: Yuka Kudo
Stylist: Maruri Kawakami
Model: Saho

PLUG 042

PLUG 043

THE MAKING OF SCENE



ヘアメイクのコンセプトは、街の日常にわずかな違和感を差し込むこと。挑戦できそうで出来ない、そんな境界を探りながら街に自然に溶け込みつつも鋭さを残すヘアデザインを構築した。衣装もまた、ロケーションとのコントラストを計算し、レイヤードの量感や質感、シルエットを精密に選び取っている。撮影の舞台となったのは、岡山市中心部・後楽園エリア。平日でもツーリストが行き交うこのエリアに、スタイリングが非日常の輪郭を描き出した。岡山城下町の文化が残る風景の中で、強度のあるビジュアルが顕れた。



EXPERIMENT #03
location
@ Okayama city

CASTLE TOWN AREA

SCENE #03

Hair: Ryoma Ishimura
(From_Rilie)
Makeup: Yuka Kudo
Stylist: Maruri Kawakami
Model: Miyu Saho



二人のソロカットを終え、舞台は岡山城下の鳥城みちへ。ここではベアとしての新たな関係性を描き出すため、一人の衣装とヘアメイクを刷新し撮影が進められた。ありふれた路地に浮かび上がるのは、ヴィヴィッドなピンクを基調にした異素材の衣装。ネオンピンクやネオンオレンジのリップカラーが新鮮な違和感をもたらし、ルックはサイケデリックな気配を差し込んだ。鳥城みち沿いにある現代アート美術館「Rabbit Hole」に立ち寄り、美術館前でもシューティング。コンテナホラーな佇まいを放つ建物と二人のモデルは非日常の輪郭を鮮やかに描き出していた。



THE MAKING OF SCENE

PLUG 053

PLUG 052



Styling & makeup credits

Yuka Kudo

@yuka_k_uma
On Instagram



Maruri Kawakami

Maruri Kawakami
On tumblr



PLUS 061



PLUS 060

サロンワークを通して〈装いが人を活かす瞬間〉を何度も見てきた。
その積み重ねが「地方装生」につながると信じている。

(by Ryoma Ishimura)

特集：地方“装”生×制作舞台裏

The expression of “Styled For Regional Revival” revealed in the hair and makeup of three individuals.

プラグマガジンが掲げる「地方“装”生」は、「創生」ではなく「装生」。

人口や経済の数字ではなく、“この街はカッコいい”と感じられる感覚を地域の力へ変えていく考え方です。

そのカッコよさは、単なる見た目や流行ではなく、

Ethos（人の魅力）、Pathos（情熱）、Logos（論理）が交差するときに立ち上がるもの——

私たちはそれを「Three Appeals with Style」と呼んでいます。

しかし、入り口にあるのは髪型や化粧も含めた「装い」。

今回は、地域の“装”の担い手である3サロンの美容師に、このテーマをそれぞれの解釈で作品にしてもらいました。

60年代カウンターカルチャーを思わせる反骨の表現、

街の日常に小さな違和感を差し込むカラーとデザイン、

等身大の可愛らしさを半歩先へ進めるスタイリング——

本企画では三者様の「地方“装”生」を街中で写真に収めています。

撮影後に集まってもらった今回のづくり手5名。次ページからは、美容と街のこれからについて訊いた対談インタビューです。



Location : STAND TOKYO

Instagram @stand_tokyo2024

今回の特集を撮り終えて、対談のため一堂に集まった一夜。
写真右から、yuki, lulu(共にbaho IZM)、石村亮馬(Rilie)、米井大介、田中亜依(共にParveMix)